

3 ^{もくぞうじぞうぼさつりゆうぞう}木造地蔵菩薩立像 1 軀（彫刻）

^{あしほぞ}足 柄に康永四年の銘がある
^{つきたり}附 ^{ぞうないのうにゆうひん}像内納入品

一、木札 慶長口卯の記がある 1 枚

一、木札 元禄十一年の記がある 1 枚

所有者 奈良市北川端町7番地 ^{ふこういん}普光院

像高159.0cm 南北朝時代（康永4年／1345）

普光院の本堂脇間に安置される等身大の地蔵菩薩立像。左手に宝珠を捧げ、右手で錫杖^{しやくじょう}を執る一般的な姿にあらわされる。寄木造りの構造になり、体軀はやや細身ながら抑揚があり、面相は頬が豊かに張り、衣文の彫法は整っている。足柄^{あしほぞ}には康永4年の墨書銘があり造立年代を示すとみられるが、作風は古様を示し鎌倉時代の慶派の様式を踏襲する。像内には天正13年（1585）の修理銘や、慶長8年（1603）および元禄11年（1698）の修理木札があり、もと今在家^{いまざいけ}に伝来したことや、般若寺町浄福寺の僧により修理されたことなどが知られる。奈良時代の古像から転用したとみられる台座も珍しく貴重である。地蔵菩薩像の基準作として南都の中世彫刻史上注目される。

